

第 23 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師 路京華 老師

レポート：岸 奈治郎（岐至 漢方クリニック）

開催日 2016 年 11 月 5 日

今回は前回提示された症例に対して、路先生が解説をされました。

【症例】

25 歳女性

主訴) 自汗・盗汗

現病歴)

X 年 3 月 26 日 帝王切開で男児出産。出産後 3 日目の夜、風に当たって体が冷え微熱が出た。熱は下がったが自汗と盗汗が残った。「固精参茸丸」を服用したが効果は無かった。

(数日入院)

退院後 1 週間経って、産褥気の諸症状に加え、背中と腰・上腕の冷え、皮膚掻痒感、不眠が出現してきた。その後他の症状は改善したが、背中と腰の冷えはずっと続いていた。

X 年 4 月 26 日 再び体の冷えを感じ不眠が出現した。

100 日経てば治るかと思ったが症状は改善しなかったので、

X 年 5 月 漢方薬を飲んでみたが治らないので、公安門中医研究院を受診した。そこで冷えを改善する薬を 14 日分処方され、やや改善。

X 年 6 月 冷えはよくなったが自汗と掻痒感が気になるため再び上記医院受診。前回の処方に加味した薬を 14 日分処方され内服。自汗、冷えは酷くなったため路先生を尋ねて来た。

既往歴)

特になし

アレルギー 海鮮

現症)

汗：自汗 胸、背中、右肩、右上腕外側末端、頭部にかきやすい。動くと酷くなる。時には滝のように流れる。発汗後畏風。盗汗もある。

冷えやすく、時々寒気がする。

疲れて力が出ない。

全身の掻痒感がある。赤い風疹が見られる。



口渇があり水を飲みたがるが、飲んだ後に沢山汗が出る。

煩躁、易怒、抑うつ感がある。

食欲正常。二便正常。睡眠良好。

辛い食べ物が好き。

視診：面色恍白 血色が無い。

脈診：沈細弱

舌診：舌体痩せている 舌質暗紅 黄色くて厚い膩苔 裂紋あり

=====

路先生

「私の考え方としてはこういった弁証になります（下記参照）。

日本ではあまり気にされませんが、中国では、出産後の女性が風に当たるのは非常によくはない、ということを誰でも知っています。そうすると出産後の女性は家に帰ってくると窓を閉めて厚着をしてどうにかして外側の風に当たらないようにします。家族もそうするのが当たり前だと思っているので、出産後の女性には家事などはやらせません。出産後の食事では卵と鶏肉のスープがよく食べられています。これは栄養をつけるためですが、たくさん食べて動かないと体内で熱を作りやすくなってしまいます。本来汗が出るということは、汗と一緒に気が漏れる。特にこの症例では滝のように汗が出るという症状があります。つまり、一緒にたくさんの気を失っているということなのです。」

「傷寒論では汗が出れば陽を傷つけるので桂枝加附子湯を使います。汗は津液です。黄帝内経 靈樞 決気では「腠理発泄 汗出溱溱 是謂津。～谷入氣滿 淖沢注于骨 骨属屈伸 泄沢補益腦髓 皮[月夫]潤沢 其謂液」とあります。腠理から汗として出ていくものは津で、関節液や脳脊髄液、皮膚を潤したりするのは液だと言っています。津と液は異なっており、津のほうがサラサラしていて液の方が粘っこいです。津は組織液、汗などのさらさらしたもの、液は髄液や関節液などがそれにあたります。津が外に出る時には汗となりますので「津汗同源」と考えているのです。津が汗として出る時にはエネルギーを伴って出て行ってしまうので、当然水分としての陰を傷つけますが、気も消耗していきます。」

「傷寒論の太陽病では身体痛がありますが、風邪に罹患した時に関節痛や筋肉痛が起こりますね。麻黄湯の条文にも身体痛があつて汗がない時には麻黄湯で治療をします。このときの痛みは、邪によって太陽の経絡が滞ってしまったり、寒邪によって衛気が収斂したりすることによって起こる痛みですね。でもそうでなくて、邪に罹患をした後發表薬で汗を出して治療をした後に身体痛がでることがあります。そういう痛みは「発汗後身体痛脈沈遅者」となり、その時には桂枝加芍薬生姜各一両人参三両新加湯を使います。桂枝と芍薬を組み合わせると衛気と営気を和する働きがありますね。それとともに芍薬には血を補う働きがあり、これが結果的に営陰を補うことにつながりますね。太陽は表をつかさどります。体表には衛気と営気があります。汗を出した後に消耗するのはこれらの衛営の

ことです。治療としてここを養うためには黄耆を使いますし、処方としては玉屏風散を使います。しかし表の気虚がもっと進むとどうなるかというところ表の陽が虚します。つまり邪によって太陽病になり「表の気」を損なった時には桂枝加黄耆湯を使い、もっと進んで「表の陽」が傷ついた場合には桂枝加附子湯を使うというような具合です。傷寒論の時代では黄耆をあまり使わずに表の気を補うためには人参をよく用いていましたので桂枝加芍薬生姜各一両人参三両新加湯となって、黄耆ではなく人参で表の気を補っていますね。」

「金匱要略ははじめから黄耆が使われています。こういう薬の使い方の違いがあることから、傷寒論と金匱要略が同じ本だった、というのは疑問がありますね。」

「本来汗がたくさん出れば表の気が漏れていき、それが進行すると陽気を傷つけるということはわかりましたね。陽が虚すれば冷えます。この症例では3ヶ月間ずっと大量に汗をかき続けているので当然体のエネルギーを消耗しているはずなので、気虚で冷え切った絶の色になっていとおもいます。それは色が薄ピンクとか白とか淡担っているはずですね。ですがこの患者さんの舌を見てみると、予想に反して紅くなっていますね。舌が赤いということは熱を示しますが、体のエネルギーを消耗して冷えているということと矛盾しています。これをどう考えたらよいのでしょうか。」

「「太陽病発汗、汗出遂漏不止、其人悪風 小便難 四肢微急 難以屈伸者 主治桂枝加附子湯」 汗を出した後に漏れて止まらなくなると悪風があります。今回の患者さんもそうですね。つまり陽気がだいぶ傷ついてしまっているということがわかります。津液も消耗していますが陽気の消耗の方が重大な状態になっていますね。

表虚が深刻になると衛陽不足になります。そうすると腠理の開合がうまくいかなくなってきます。これは表と裏の開合もそうですし臓器同士の開合もそうです。もっと言うと自然界と人間の開合についてもそうですね。会合がうまくいかなくなると開いたままになってしまい、外側の寒さに対する耐性も減ってとって寒がりになるし、汗も出て行ってしまい、最終的には滝のように流れるようになってきます。まさにこの患者さんの症状を説明していることになりますね。」

「この患者さんは舌を見ると熱があることは明らかです。さてこの熱はどこからきているのでしょうか？症状としては煩躁、怒りやすい、という症状があり、これは熱を思わせる症状です。熱があると口が乾きやすいという症状があるのは自然ですが、今回の症例では汗がたくさん出てしまい津液を消耗しているので、それが原因で口が渇くということも当然あります。また、症例文の中に「怒りやすい」という記載がありますが、怒るにはエネルギーがないと怒れませんね。この人はもともと辛い物が好きだったので熱が生じやすい環境ですし、出産後たくさん食べてエネルギーも湿もため込んでいますね。また、汗がたくさん出るのが渇くとたくさん水を飲みますよね。水をたくさん飲むと脾胃に負担がかかりますね。飲んだ水がすべて上手に吸収して使えるようになっていけばいいのですが、それはわかりません。脾胃がうまく働かなければ吸収できずに湿としてたまってしまいますよね。体が冷えていけば寒湿、熱があれば湿熱ということです。それではこの場合はどちら

でしょうか？舌を見ればわかりますね。」

「出産によって精血が傷ついて、出産後表の気陰の消耗によって体の内側は空っぽになってしまいます。それを弁証すると「洞虚内外」となります。それほど虚しているのにもかかわらず熱がある。この熱は何でしょうか？それは内側に湿が溜まってしまってそれが熱をもった、と考えるのが妥当ですね。それらの余計な熱は取らなければいけません。」

「少陰病 得之二三日以上 心中煩不得臥 主治黄連阿膠湯《傷》

黄連 阿膠 黄芩

少陰病 真陰欲渴 壯火復熾 心中煩不得臥 主治黄連阿膠鷄子黄湯（温病上編）

黄連 黄金 芍薬 阿膠 鷄子黄

ここで言いたいのは、壯火による熱も陰虚による熱も治療しなければいけない、ということなんです。」

平馬先生「そうすると辛い物が好き、陰虚による虚熱が重って湿熱が生じているということになりますね。」

路先生「《温熱論》「陽旺之体 胃湿恒多 陰盛之体 脾湿亦不少」とあります。陽が旺盛な人は胃に湿が多く、陰が旺盛な人は脾に湿が多いというわけです。この症例の場合は津液を消耗しているという状態と、湿が溜まっているという二つの矛盾した病態が同居しています。そして湿が溜まると三焦の気機が不利になります。「湿邪粘臟 阻過気機」とは、湿邪は臓器に粘りついて気の流れが悪くなるということなんです。三焦は津液、気が交通するところなのでより一層流れが悪くなってしまいますね。流れが悪くなると、衛營が虚した表に気が到達できずそれによって陽も虚してしまい、裏には湿が溜まり実となり全体的に不調和な状態になって、より一層病態を複雑にしています。」

「陰虚の場合に熱がありますが、その時の舌の特徴は嫩紅と言います。植物の葉っぱが完全に緑になる前の若葉の状態を嫩と言います。ですので嫩紅というのは舌が真っ赤になる一歩手前の真赤になりすぎているけれども普通よりは赤い状態の舌の色のことです。今回の舌の色は嫩紅よりもより赤いので、実熱による赤味が強いように見えます。」

【病機】

産後傷精耗血 久汗耗気傷津 洞虚内外

表裏俱虚 虚中挟熱 虚熱実熱互雜

又加湿阻化熱 三焦気機不利

表裏陰陽不和 舌不嫩紅

【弁証】

気陰両傷 湿熱中阻

表虚裏熱 気機不暢

【処方】

生黄耆 15	西洋参 8	功劳葉 15	南沙参 15
麦門冬 12	玉竹 12	炒杏仁 10	炒薏仁 30
佩蘭 12	藿蘇梗各 12	茵陳蒿 12	枇杷葉 15
丹参 15	桂白芍 15	炒蒺藜 12	夜交藤 15

黄耆 西洋参 ～補気剤

功劳葉

別名：十大功劳葉 ヒイラギナンテンなどの葉

微苦 涼 肺腎

清退虚熱 滋陰潤腸 補腎強腰 明目
消腫

滋陰清熱 虚風の時に補腎剤として使
われる

沙参、麦門冬、玉竹 ～滋陰剤

杏仁：通調水道の作用があり上焦に位置する肺に
作用して、肅降作用を強め水のめぐりを協調させる。

薏苡仁・藿蘇梗：湿の水源である脾胃に作用して、かろやかにめぐりをよくすることで湿
を取り除く。

佩蘭（はいらん） キク科フジバカマの全草

辛・平 脾、胃、肺經

佩蘭は芳香化湿薬のひとつであり、脾胃を覚醒させ、胃
腸に溜まった湿濁の気を除く作用があると説明している。
また佩蘭は湿濁によって生じる「脾痺の要薬」。

中焦の湿滯に用いられる芳香剤に属する。其化湿和中之
功與藿香相似，治湿陰中焦之證，每相須為用，蒼朮、厚
朴、などと用いられ、芳香化湿の功を強める。以其能化
湿，亦治脾經濕熱、口中甜膩、多涎、口臭等。また、外
感暑湿、湿温病の初期に用いられる。暑邪を解し、藿香、
荷葉、青蒿などとともに用いられる。湿温病の初期には、
滑石、薏苡仁、藿香などと用いる。



桂白芍：

白芍を桂枝と一緒に炒めた物。芍薬の涼性を緩和するための修治。産婦人科では、出産後
は虚寒になるため涼性の芍薬は使ってはいけないといわれていた。清熱剤は当然使えない
が、ひどい時は芍薬さえ使えないと考えられていた。